

「愚直なODA」が最後に勝つ

——途上国への日本のODA(政府開発援助)について、にわかにならぬ論がはびこり出しています。

渡辺 日中関係の悪化が痛かったですね。中国は日本の開発援助の最大の受益国ですから。日本人は反日暴動を見て何だこれは、という思いに駆られたのでしよう。しかし、日本の国民の側にも色々な誤解がある。中国ほど日本の援助資金を効率的に使った国はない。「自助努力支援」、これが日本のODAの理念ですが、中国はそのみごとな代表国でした。

——中国は円借款を実に律義に返してくれているそうですね。

渡辺 そう、昨年にはついに元利返済額が同年の日本からの円借款供与額を上回りました。だが、対中円借款は北京五輪のある二〇〇八年で打ち切ることになってしまいました。沿岸部の港湾、空港、発電所など産業インフラ整備を支援してきたODAですね。

——これからは内陸部ですか？

渡辺 中国は巨大な経済国になった

わけですが、国民総所得(GNI)は一人あたりまだ二千ドルほどです。とりわけ内陸部には「絶対的貧困」が厳然としてある。それに、大気汚染を中心

に環境問題はいよいよ深刻です。汚染大気は偏西風に乗って日本に酸性雨な

Interview

渡辺 利夫

外務省ODA総合戦略会議議長代理
拓殖大学学長

1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大教授、東工大教授、拓殖大国際開発学部長などを経て2005年4月から同学長。「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞、「神羅症の時代」で開高健賞正賞。

どをもたらしている。環境改善を主眼とした対中ODAは今後もわが国援助の重点でなければなりません。

——どんな使い道なのか、「目に見える」ODAが求められています。

渡辺 外務省のODA総合戦略会議は、ODA改革の新たな取り組み方を打ち出す作業に入った。主要課題が別ODA計画の作成です。対象国こと

に、どの分野にいかなる形態のODAをどのくらい供与するかを策定しています。国別に、第一級の地域研究者から成るタスクフォースが生まれた。

——対中環境協力は？

渡辺 重慶、貴陽、大連を対象とした環境開発モデル都市のプロジェクトは注目していると思う。効果がはつき



り目に見える形にしています。大気中の汚染物質濃度、市民の気管支炎罹病率などの数値を精密にモニターして、技術的な施策の実効性をフォローする。

——渡辺さんはリンケージ型援助を主張していますね。

渡辺 はい、一例を挙げると、アフガニスタンでは、麻薬との戦いのためケシ栽培の農民を他の換金作物に誘導

しなければなりません。日本の農業専門家にはその方面のノウハウがない。

そこでケシ栽培撲滅運動の経験が深いタイの専門家にアフガニスタンの代替作物づくりの指導を頼んだらどうか、と考えています。今後は、こういう三

国間の連携事業を大切にしたい。

——インドネシアで普及した母子手帳の日本モデルなども、乳児や産婦の死亡率低下に随分役だっているとか。

渡辺 確かに多くの問題はありましたが、日本のODAは着実な成果を収めてきたと私は見えていますよ。

——新しい理念が必要なのですね。

渡辺 ODAは日本の国際貢献の本流だと思う。日本は現在ODAをGNIの10.2%から10.7%にまで引き上げる国際公約を明示しています。将来にわたって世界でトップ・クラスの援助大国であるよう努め、それを静かに誇りとしたらいい。「愚直」と言われるのを恐れず、貧しい人々、虐げられた人々がそれで立ち上がるとっかかりを得てくれるなら、それこそ本物のODAだと思っています。

インタビューアー 伊藤光彦